

インド U. P. 州 Udharanpur 村を訪ねて

—ex-zamindari の村—

すぎ たに しげる
杉 谷 滋

I

Tahsil Office の裏側にある官舎の軒が長く伸びて、かなり広いテーブルとかたい木製の椅子を置いた地面を強烈な太陽からさざぎっていた。ロマンス・グレーで彫りの深い顔の Police Inspector は威厳の中にも親しみをただよわせながら話しつつづけるのであった。

「このあたりは、U. P. 州の中でももっとも犯罪の多い地区の1つである。貧困に加えて人々の気性は荒い。犯罪の多くは窃盗であるが、争闘、売春、それに独立後は選挙にからみ党派間の暴行沙汰が絶えない。犯罪の10%は党争によるものである。そこにすわっている2人も会議派の運動員だが、騒ぎを引き起こすだけで、よいことは何ひとつやらぬ。」

2人のやせて小柄な男が白いガンデー帽の下にたえず目を動かし、1つの椅子に重なるようにしてわれわれの会話を聞いていたが、みな視線が一度に集まったので困惑したような笑いを浮かべた。英語はわからぬらしい。広い官舎の庭は、向こう側の低い土壁の垣根まで何もなく、赤土の地面に真昼の日光が照り輝いていた。

「この警察署は100にちかい村を管轄下においているが、警官はわずか50名しかいない。手が回りかねる。」

日本のような駐在制度はない。報を受けて村々へ出動してゆくのである。日本の駐在制の説明をすると、「That's good. Good!」と声に力を入れてうなづいた。

「端境期にはどこからともなく dacoits (盗賊) が現われて、村々を襲う。かれらの持つ小銃は村の鍛冶屋が作ったものだ。値段は45ルピー。弾丸はライセンスを持つれっきとした町の銃砲屋が横流しをやる。普通1弾1ルピー(インド製。イギリス製は1.5ルピー)であるが、dacoits は4~5ルピーで買う。」

使用人が茶とフレンチ・トーストを持ってきた。茶碗と皿の数が足りない。

「この紳士方はきわめてオーソドックスで、われわれからは何も受け取るうとはしない。」

Inspector は多少の皮肉をこめて左手を振りかえった。そこにはわれわれの host である Misra 氏が、息子と従弟を左右にして坐っていたが、ネルー・シャツとドーティは、このことばにもびくりともせず石のように押しだまった3人を包んでいるのであった。かれらは旧ザミナールでありブラーミンである。Inspector は回教徒なのだ。いかに Inspector がかれらの尊敬を集め、社会的権威を振るおうとも、その手からブラーミンは食事を受け取ることはできぬ。宗教の戒律はきびしい。

「君たちが他の村を見たければ巡査を1名君たちにつき添わせてもいい。この連中はいい面しか見せてくれぬだろう。」

かれは Misra 氏を振りかえった。

「村の貧乏な部落も見せてやりたまえ。」

II

Udharanpur は Hardoi から Shahjahanpur へいたる街道に面した人口約1000人の村である。バスの中で聞いた話では教育を受けた住民の多い村ということであったが、文盲は人口の9割以上を占める。8割以上が農業従事者であり、小麦、豆類、大麦、米の順番に播種面積が大きい。サトウキビもかなり栽培されているが、これは井戸水灌漑でエンジンやモーターを使用しているものもある。

ここは Misra 一族の支配する村である。われわれの host の家を含め、Misra 3つの家族が zamindari としてこの村を保持していたのであった。

村一番の堂々たる煉瓦塀にかこまれ、寺院のような高い門構えの家の横に、塀からひさしを出したみすぼらしい一室だけの家があり、太って顔色のよい隠居がベッドの上にすわって村の古い話をしてくれた。

「遠いむかしには、ブラーミンとクシャトリアがこの村に住んでおった。そこへ回教徒がやってきた。ほれ、Shahjahanpur というのは皇帝 Shahjahan が作った町という意味だ。ところがクシャトリアはかれらの支配を受けるのを好まず、ある夜回教徒を襲ってみな殺しにした。しかしまもなく回教徒の軍隊がやってきて、クシャトリアは打ち敗かされた。回教徒は殺された仲間をいたんでモスクを建てた。このモスクは今でもこの家の裏側にある。そこの木の下の子井戸は古戦場の名残りなのだ。」

「こうしてこの村にはブラーミンが残った。やがて新しい支配者イギリス人がやってきた。」

「われわれの父親たち3人兄弟は野心に燃えていた。」

かれらはイギリス人の経営する酒の醸造会社へ働きにいったり商売を覚え、シムラ、ボンベイ、カルカッタへ散って酒類販売店を開いた。商売は成功した。わたし自身はといえばシムラで育った。1年に1度か2度この村へ帰ってきたものだ。」

「父親たちは酒だけでなくさらに商売の手を広げた。たとえばこんなことがあった。1人の息子が町へ出て靴屋へはいった。靴屋のおやじはかれにいった。この店はイギリス人を顧客にしており、君になど靴は売らぬ。息子は帰って父親にこのことを訴えた。父親は怒り心頭に発し、すぐその靴屋へ行き、おやじにどなった。おれはこの店を買うぞ。いくらだ。いえ。かれはおやじのいい値どおり金を払ってこの店を手に入れたわけだ。」

「年が経ち、3人兄弟はかなりの金を貯め込んだ。そのころ、この村にはイギリス人の退役将校が住んでおり、かれは zamindar の権利を買ってやってきたわけなのだが、この村を離れたがっていた。3人兄弟はこの男から zamindar の権利を買い受け故郷へ錦を飾った。3人の Misra がこの村全体の所有者になったのだ。」

III

host である Misra 氏の家はほぼ正方形で、四方を高い煉瓦の壁で囲まれ、部屋は内側の庭に向かって開かれ、外側には1つの窓もなく、目だたぬ入口が西と東の壁に2つ穿たれているのみである。いつでも取り出せるところに小銃がおかれている。すべて dacoits の襲来に備えてのことだ。

家の裏側は広場になっており、1棟の平屋が使用人の住居と牛の飼料おき場に使用れ、さらにその向こうに一段低く牛小屋と広場があり、水牛、牛、子牛が地面に埋め込まれた「かめ」から草を食べている。

われわれは使用人頭と、たまたま村に来ていたマラリヤ防疫員（公務員）と、ベッドをこの屋外の平屋の軒下に並べ夜をすごすことになった。もちろん食事もここで取る。

Misra 氏は弁解するのだった。

「むかしは外国人など招待したらわれわれは outcaste になった。いまはそれほどきびしくはないが、しかしカースト制は根強く残っている。悪い。悪いことだ。カーストがインド農村の進歩をはばんでいる。」

最初の夜だけわれわれは屋内で食事をした。中庭は一隅に井戸と浴室があり池の隅に小さなかまどがしつらえてあるほかは何もない。

男どもは上半身裸体になり、ドーティーだけを腰に、車座にすわり込んで食べる。夕闇の迫る中で斜めにかけた聖なる紐が黒い皮膚の上で白く光る。

IV

夜が明けると人々は小さな真鍮製のつぼに水を入れ野へ出かける。農村で便所を持っている家はまずない。紙を使わず水で後を洗うのだ。

息子が先に立ってわれわれも野へ出た。もうすでに労働者たちは働いている。朝5時ごろから正午ちかくまで野で働き、午後は村で仕事をするとする。だがこれは Misra 家の使用人の場合である。朝早くから夜遅くまで働いて男大人1日1ルピーの日給、仕事のない日は家で寝ているよりしかたがない。

朝飯を食べて一服したあと、息子とかれの友達が畠へ案内してくれることになった。

使用人頭が先頭に立って案内する。背の高いかれの後姿のなんとやせていることか。上半身は常のように何もつけず、古いドーティーにはだしであるが、普通使用人にみられる卑屈さはどこにもない。

Misra の息子が話す。

「かれはブラーミンである。長いあいだわたしの家で働き、逆境によくわたしの父を補佐してきた。かれはわたしの面倒をよくみてくれた。いまでもわたしはかれに相談する。」

使用人頭は左右両手に小型のバケツを下げゆっくりと歩いて行く。左のバケツには入っているのは水であるが、右手のは茶褐色のどろどろした液体で、揺れるたびに日光を反射し鈍く輝く。

「あの液体は畠で働いている使用人たちに与える refreshments である。サトウキビの汁を煮つめたものにバターをとった残りの牛乳を加えてある。」

U. P. 州の平原は真平らである。見渡すかぎり畠と林と、散在する部落とが地平までつづく。

サトウキビの密集した広い畠を指し Misra の息子はいった。

「これはわたしの畠だ。500ビガーある。」

かれは農耕にはまったくタッチしていない。その証拠に、何を聞いてもすぐ使用人頭に答えを求め、じぶんでは何もわからぬのである。しかし、この500ビガーはまさしくかれの土地なのだ。

U. P. 州の農地改革のみじめな結果はあまりにも有名であるが、かれの父は改革により奪われる土地を最小限

現地報告

に押えるため、名目上家族のあいだに土地を分配したのである。こうしてかれは土地保有限度80エーカーの規定にもかかわらずいまだに2000ビガーを保有しているのだ。サトウキビは輪作の一環として作られているのだが、見渡すところかれの島の主要部分はこの換金作物であるサトウキビが生いしげっている。ラクノー大学の学生であるこの息子はもとより、父親 Misra もほとんど島へは出ない。先を歩いて行くやせた使用人頭が、母屋の外に建てられた暗い平屋に住み込み、いっさいを監督している。かれはついに一生妻をめとらなかつたという。

かくして、この Misra 一家は、大人の使用人5人に、日給1ルピー、子供の使用人2人には月給13ルピーを支払って、年収1万4000ルピーをあげているのである。長女は持参金1万ルピーをつけられ、Kanpur の工場主の息子に嫁いだ。

できはよくない (Bombay, Deccan で見たサトウキビの茎の太さに比較したら半分もない) が背の高いサトウキビの畝を抜けて灌漑用タンクのほりに出た。タンクといっても水溜りの巨大なものと思えばよい。

Misra 家の使用人が3人、麦を播くまえの畝を牛にひかせた「すぎ」で耕していた。雄牛2頭1組で3組、縦に一列となって長方形の畝をゆくりと往復している。

使用人頭はバケツを下ろし、先頭のすぎを握った。

「かれはああやってどうすぎを使うか教えているのだ」という。そのあいだ交替した使用人は2つのバケツをがたがたいわせながら、例の茶色の液体と水を混合している。白髪が多くなった使用人頭の顔は静かな微笑をたたえているが、かれにつづく2人の顔は黒く暗い表情を変えない。

しばらくして休憩である。2人の使用人は地面にしゃがみじっとしていると、最初の使用人が真鍮のつぼに茶褐色の液体をみだし、2人の重ね合わせたのひらの上へ流してやるのであった。目を細め、てのひらの下へ口をつけて、長く長く下りてくる液体を飲みみつける。

見よ、幾千年を経たカーストの規律はいまなお生きつづけ、村人の日々を規定しているのだ。

このしゃがみ込み、飢えた胃を液体でみたそうとしている2人の使用人は、ブラーミンの持ってきたバケツにも真鍮のつぼにも触れることはできないのである。

液体を注ぎみつける最初の使用人のみが、中位のカーストに属するがゆえに、かれらのためにバケツとつぼを操作する権利を保持するのだ。

V

午後の日ざしは暑い。軒下の cot (簡易寝台) で昼寝をしようと試みたが、無数のハエが顔にたかり、寝ることができぬ。横を見ると使用人頭はシーツを頭からかぶり寝入った様子である。まねをしてみたが暑くてどうもならぬので断念した。

数日水浴をしてないので、水を浴びたいというと、井戸ばたがよいか、ここへ水を持ってこようかと聞く。屋内にある井戸だろうと想像して井戸ばたがよいというと、屋内ではなく表通りの道ばたの井戸に案内されたのにはまいった。中位カーストの少年がやってきては水を浴びてゆく。

ふんどし一本になり、使用人の少年が汲んでくれる水を浴びるのだが、まわりの家々から男も女も出てきてじっと見つめているのが気になってしかたがなかった。1つか2つの家を除いては、黄褐色の泥土でかためた歪んだ家々であり、その前に人々はすわり込み、あるいは立って、笑いもなく、声もなくこちらをみつめているのであった。

このような扱いを受けても怒ったりせぬことが肝心と考える。かつてはハリジャン並みだった外人を客人として接待し、いろいろと調査の便宜を計ってくれるのだから。水はひどく冷たい。井戸が深いからだろう。空は雲の一片もなく青く青く広がっている。

VI

この村には電気はない。壁につるしたケロシン・ランプが鈍く、幅の広い Misra 氏の顔に陰影を与えている。われわれとかれとはほとんど膝をつき合わせんばかりに、不安定な cot の上にすわって何時間も話しつづけているのであった。

思いつめたようにかれは語る。不自由な英語で心の中につきつぎと起ってくる想念を表現しようとして、かれの顔もがっしりした体も努力に緊張し、ことばにつまるたびにもどかしげにけいれんする。

「村の生活はよくない。だんだんと悪くなる。これからは都会の時代だ。わたしは息子に百姓をさせたくない。それで息子を大学へやった。息子が都会で暮らしてくれることを望んでいる。」

「むかしはこうではなかった。むかしはよかった。政府はわれわれ zamindar を圧迫する。われわれの権利を奪う。われわれは利巧だったから、農地改革が実施され

るまえに情報を集め資料を読み対策を立てた。しかし多くの zamindar は土地を奪われ、貧乏の底へ落ち込んだ。このまわりの村々には、食うに困り、事務員として働きに出ている ex-zamindar がたくさんいる。」

「われわれは以前も実際に農耕をやっていたからよかった。土地は保持した。しかし今後はどうなることか。」

「選挙制の導入が村の平和を破壊した。他のブラーミンの連中がわれわれ zamindar を目のかたきにして、アシテーションをやり、反対候補を立てる。この連中は土地をほとんど持っていない。せいぜい 1 エーカーだ。だからかれらは学問をする。Hardoi へ勤めに出る。インテリはわれわれの敵だ。」

Misra 氏はかすかに笑った。

「かれらは選挙でありとあらゆることをやるが、敗けるとわれわれのところへまたいろいろとたのみにやってくる。」

かれは前サル・パンチであり、現在は pradhan をしている。

「Misra 派と反対派の 2 つの派閥が争っているのだ。人間は悪くなった。わたしは夜、出歩くことをしない。反対派の者が襲ってきて、わたしを殺そうとするかもしれぬ。」

寝しずまった村の静けさ、その向こうにはもたなく広がる暗黙の平原が Misra 氏のことばに恐ろしいほどの迫真性を与えた。

「人間は悪くなった。だれもかれも嘘をつく。わたしにしてもが選挙に勝つために嘘をつかねばならぬ。もし思うことをそのままいったら、だれが投票してくれよう。わたしは嘘つきだ。」

このまじめな中年の男の告白はわたくしの心を打たずにはおかなかった。かれは父を早く失い、zamindar の権利を守るために若い時から戦わねばならなかった。いや農地改革前にはそれを増やしさえしたのである。息子の話によれば、若いころのかれは、土地をかれから奪うためにその命をねらう親戚の脅威から身を守らねばならなかったという。

政治とは残酷なものだ。いかに zamindar が貧困な村人を搾取しているとはいえ、かれらはまたかれらの夢を持ち、希望をいただき、将来のために努力してきた。その生活の基盤を一片の法令が破壊し去るのだ。

この村へ来るバスの中でわれわれは 2 人の男に会った。1 人はやせて小柄の男で、眼鏡と小さなちよび髭が印象的だった。われわれに対するときにはここにこじてい

るが、下のカーストの男たちに対するときはずっと威厳をつける。この男も ex-zamindar であり 600 ビガールを没収され、現在は 200 ビガールを持っている。ラクノーが大きい市場であるから養鶏をやって卵を売るつもりだといっていた。

いま 1 人は Udharanpur の男で Panditji と呼ばれていた。政治づいた男と一見してわかる太った体と人を見下すような顔付き、そしてガンジー帽にネール・シャツそしてドーティーだ。ろくに人にもものもいわぬ。むっと黙りこくってすわっていた。Udharanpur で下車したとき、かれに道を尋ねたのだが、かれはゆうゆうとした態度を現わそうとしているような足どりで案内に立った。不気嫌な顔付きであった。

われわれは知らなかったわけであるが、この Panditji こそ、反 Misra 勢力の一方の旗頭として、このまえの Pradhan 選挙に候補として打って出、敗北を喫した男、つまりわが host, Misra 氏の宿敵だったのである。かれはいかにも会議派に属する村の政治屋という風貌であったが、Udharanpur の政争には会議派と他の政党との対立という要素はみられない。いまだに純粋な村内の争いとどまっているようであった。

VII

Tahsildar がお茶に招待してくれたので、早目に出発する予定であったが、Misra 3 家の 1 つ、このまえ村の歴史を聞いた隠居のせがれがそのまえに来てくれという。

母屋の裏が広い庭になっており、しだいに低く島へ連なっている。その中ほどに一段と高くセメントで固めた台を 4 本の柱でささえたる屋根でおおった小さな小屋がある。暑さを避け、ひまな時間をしゃべりながら過ごすために造られているようだ。

当主 Misra 氏がゆったりと椅子に腰を下ろしていた。かれはやせて、やや神経質な顔付きをしている。どう見ても農民の顔ではない。うまい英語を話す。例によってお茶が出されスリカンダが出る。

かれは 15 マイルほど離れたところに 200 ビガールの土地を持ち、トラクターを用いて耕作を行なっている。ほかに農地改革で 200 ビガールを失ったが訴訟に持ち込み係争中で、この土地は耕すこともできず放置されている。

いろいろと話が出たが、Misra 3 家が政治、経済の実権を握っていることは明らかである。ついわたくしの口から感想めいたことばが出てしまった。

“You are really the rulers of This village”.

現地報告

かれは打てば響くようなすばやさで答えた。その細い顔に微笑を浮かべながら。

“No. Formerly we were. But nowadays servants are the rulers”.

VIII

Tahsildar の官舎のベランダは「みず」が張られ外部から見えぬようになっていた。机をいくつか横に並べ、白いテーブル・クロスでおおい、Tahsildar をはじめ5～6人の男がすわっていた。1人の獣医を除いてみなかれの部下である。

われわれの側は host の Misra 氏とその従弟の Misra 氏2人がつきそってきていた。2人ともこのあたりでは顔がきく。Tahsildar とも親しげに話している。

頭上には厚い麻織りと思われる大きな布が長い横木からぶら下げられ、テーブルの端に立った使用人の少年が無表情にゆっくりと細綱を引くたびに、前後にゆらゆらと揺れ、われわれに風を送ってくる。大きな「うちわ」のようなものだ。

Tahsildar はずんぐりした小柄の男だが、ほどよく大って落着きと威厳がある。地方の役人として苦勞を重ねてきたらしく、相手の不安を静め親しみを持たせるふんいがある。

かれは U. P. 州の出身ではない。M. P. 州はカジュラホの近くの出で、写真を見せてくれ、ぜひ M. P. 州を見にゆけとすすめる。ここの Tahsildar になってからまだ1カ月にしかならぬという。

いろいろと質問をし、また日本について質問をされ、茶を飲み菓子を食べているうち、時間がたっていった。ここもひどいハエだ。菓子が黒くなるほど来る。

いつしか話は農地改革におよび、新しく土地を売買するときには30エーカー以上に増えることは許されず、またすでに12.5エーカー持っている場合は新しく土地を購入できぬ、などと説明したのち、Tahsildar はなかば目をつむるようになってくびを横に振り、この制限は強行されず、大土地所有はまだ残っているといった。

このときわたくしを隣りにすわっていた若い男が声を上げた。

「農地改革はじゅうぶんに行なわれておらない。」

やせた中背の体をさっぱりした服装で包んでいる。だがその顔はきまじめで内攻的性格の強迫的な緊張に耐えようとする努力をきざみ込んでいる。じっと相手を見つめる眼鏡の奥の両眼はそのあいだに縦じわをつくり、笑

いのひとかけらもなく、みずからの内なる声を敵対的外部へ向かって投げつけるかのように叫ぶ。年は24～5才であろうか。たまに見がけるインド・インテリの1つのタイプである。

「村々には土地を持たぬ貧民がみち溢れているというのに、ex-zamindar はなおも数千ピガールの土地を持っている。」

かれはその視線を上司である Tahsildar にまっすぐに注ぎ、糾弾するかのように、訴えるかのように声を高めてゆくのであった。

集っている人々はみな、話をやめ、時ならぬこの男の興奮に気を吞まれてしまった様子である。

わたくしはそっと2人の Misra 氏を見やった。この2人だけが、役人たちの中において、土の匂い、村のふんい気をドーティーから発散させていた。2人は若い男から視線をそらし、不安げな様子に体を固くし、前方の壁をみつめていた。

「しかし……。」

若い男は内なる不満をどっと一度に放出するかのようになり、みずからにいい聞かすかのように叫んだ。

「そのうちに、そうだちかい将来、農地改革は完全に実施されるのだ。」

しらじらとした空気が流れ、沈黙が人々の姿勢を固くした。

このとき、ひとり Tahsildar は、表情を柔らげ、何ごともなかったかのように、われわれの方へふり向き、

「きてそこで……。」

と話しはじめたのである。

ふたたび親しげなふんい気が帰り、人々は話の糸をまた拾い上げ、頭上の巨大なうちわの送る風にハエが飛び散った。

わたくしの隣の若い男は、逆に沈黙に陥り、かたく自己の内部へと帰ってゆくかのようにであった。その沈痛な面持ちから、わたくしは何ごとも探り出すことはできぬ。あるいは、この男は、われわれと Tahsildar の話を興味深く傾聴しているかのような態度を取ろうと努力しているのではなかるうか。

Tahsildar の落ち着いた声の流れがゆく。

「そう、地租を払わなかった農民は留置場へ入れられますが、そういうことはめったにない。また留置場へ入れられたということが伝わると、すぐ親戚とか友人がかけてきて地租を払い帰ることになりますね。」

IX

きよりは Nyaya Panchayat が開かれる日である。Misra 3 家の 1 つの家長が Sarpanch を務めている。前期はこの男が Pradhan だった。つまり host の Misra 氏と交替したのだ。2 人の Misra が 2 期にわたって Sarpanch と Pradhan を務めているわけである。

2 人が先頭に立って畑の埃道を歩いてゆく。向かい側から来る貧しいみなの村人が立ち止まり、2 人の Misra 氏の前に身をかがめ右手で Misra 氏の両足に触れてから行き過ぎる。低い身分の者が尊敬を表現するしかたである。

Panchayat はじぶんの建物を持たぬので、いま 1 つの Misra 家の庭の隅にある小屋が使われていた。家の敷地へはいるとラクダがすわっていた。最近買ったばかりで農耕に使う予定だという。すると牛小屋の向こうに 10 人ばかりの農民がターバンをつけたのやつけないのや日なたの中にしゃがみ込んでいるのが見えた。Misra 氏 2 人にあいさつをする。

小屋の中には 20 人の Panch がすわり込んで、すでに裁判は始まっていた。この Panch たちは数カ村からの代表であるが、5 人で 1 つの法廷を形成し、交替で村人の争いを裁くのである。

気がつくくと日なたにしゃがみ込んでいるのは当事者たちでじぶんの順番を待っているのがあった。

土地の争いが一番多いという。文盲が多いのでサインの代わりに拇印を押させられていた。

Misra 氏は説明する。Nyaya Panchayat は 1 週間に 2 度開かれる。われわれは政府の仕事に追われてじぶんの家のことを見るひまがないほどだ。

政府の導入した自治組織は、かつての zamindar か司法・行政の権力をふるっていた制度に代わったはずであった。しかしその自治組織は物的・人的に ex-zamindar の Misra 一族によってになわれ、ささえられているのである。

X

農村には娯楽がきわめて少ない。だから村の青年たちは夜、女を襲ったりすることに興味をもつのだ。ちょうどお祭りで芸人の村から 1 組の歌と踊りのチームが来ており、夜 10 時半から 1～2 時ごろまで演技するという。

村の中の空地に多くの人々が集まり、しゃがんだり腰を下ろしたりしていた。真中には若いサリー姿の女が 1 人、黒々とシルエットをみせ、その足もとに 3 人の男がうずくまって無感動に楽器を鳴らしている。手で空気を送り込む板を動かす小型の harmonium、小太鼓、シンバルである。

とっぜん女が歌い始めた。かすれた声で単調な歌を手をさしのべて歌う。ケロシン・ランプの光が彼女の横顔をとらえた。暗い目付きだが顔立ち美しい。しかし笑いを忘れた顔だ。歌の調子がしだいに速くなるにつれ、下半身を左右に振る。歌に合わせて足輪が鳴りはじめる。

4 人が 1 チームで各村々へ行き、歌を歌い、踊りを踊り、いくばくかの報酬をもらって帰る。そのように宿命づけられた人々の村が近くにあるのだ。女は求められれば体を売る。

暗い夜空に、女のかすれた歌声は、運命を呪うかのよう流れてゆくのであった。

(アジア経済研究所海外派遣員)

——在ブーナー——

セイロンの人口構造と経済構造

—— アジア経済研究シリーズ 35 ——

南 亮 三 郎 編

| | |
|--------------------------|--------------------------------|
| 総 括 | 南 亮 三 郎 |
| ——研究の趣旨・研究の要旨—— | |
| 第 1 章 | セイロンの経済および人口史的概観……………小林和正・吉田忠雄 |
| ——経済、社会および地理的環境・人口史的概観—— | |
| 第 2 章 | セイロン人口の再生産構造……………小 林 和 正 |
| ——人口の推移・出生率・死亡率・結婚・概括—— | |
| 第 3 章 | セイロン人口の基本構造……………大 淵 寛 |
| ——男女年齢構造・配偶関係構造—— | |
| 第 4 章 | セイロンの人口移動……………大 淵 寛 |
| ——国内移動・国際移動—— | |
| 第 5 章 | セイロン人口の社会構造……………吉 田 忠 雄 |
| ——人種的側面・文化的側面・家族構造—— | |
| 第 6 章 | セイロン人口の経済構造……………石 南 国 |
| ——労働力人口・産業別人口・就業構造—— | |
| 関係文献目録 | |